

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：37402

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23521010

研究課題名(和文)水俣病事件における「再生する力」の社会・宗教・民俗学的研究

研究課題名(英文)Minamata: humanities and social sciences perspectives on regeneration

研究代表者

萩原 修子 (HAGIHARA, Shuko)

熊本学園大学・商学部・教授

研究者番号：60310033

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、水俣病事件を経験した地域の「再生」の淵源を問いながら、調査地との関係を通して、研究対象/研究者という関係性や、細分化されがちな人文・社会諸科学の再生も目指すものである。焦点を当てたのは、被害者/加害者の枠組みを超えた「普通の」人々の日常生活の論理であったが、成果として、身体化された日常性のアプローチに示唆的な問題系を見出すことができた。さらに、当事者による地域のビジョンの創造と実践が「再生」につながるとすれば、そこにおける学問の関わり方に学問の「再生」の契機を見出せることも確認できた。

研究成果の概要(英文)：This research aims to investigate the origin and processes of regeneration in the region where people have experienced the impact of Minamata incident for more than 50 years. The research also aims to regenerate the humanities and social sciences which have become divided into many specialist fields, by rethinking the relationship between researchers and the objects of their research. We have focused on the logic of the "daily life" of the people so as to overcome the "victims versus perpetrators" framework which explains the incident. The research has generated two outcomes; one is the identification of new problematic issues in the experience of daily life. The other outcome is identifying the moment to regenerate the humanities and social sciences. The moment when people in the region try to create their vision of their future on their own initiative may be the moment when the humanities and social sciences will be able to regenerate by supporting the people to realize their vision.

研究分野：文化人類学、宗教学

キーワード：水俣 再生 宗教 民俗 社会 人文社会科学 被害者 環境

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の出発点

本研究の出発点には、人文・社会科学系として専門分野の異なるメンバーが、それぞれの専門から「九州の近代史」研究の一つとして、「水俣」について読書会や研究会を重ねていたことがある。

分担者の飯嶋秀治が「九州の近代史」の発案者である。飯嶋は、九州の基幹大学である九州大学に着任したことを契機に、公害という九州の近代化における負の遺産を日本の近代史にどう位置づけるかに関心を抱いていた。一方で、研究代表者の萩原修子の本務校に「水俣学」を提唱する研究機関があり、水俣病事件について、当事者や支援者たちのライフストーリーに関心をもちてきたため、「水俣」に焦点をあてることになった。

山室敦嗣は、環境社会学の観点から、原発運動を研究する中で、「加害／被害」論では収まらない運動の形として、「水俣病事件」に関心を抱いていた。西村明は、専門の長崎の原爆の慰霊において、水俣病をとりあげた石牟礼道子によるルポルタージュを介して、もともと水俣病事件に関心を抱いていた。それに加え、当時の在籍していた鹿児島大学の「鹿児島環境学」にも影響され、水俣への関心を深めていた。

(2) 研究会の内容

上記の動機をもったメンバーが、2008年に飯嶋秀治の呼びかけによって、「九州の負の近代史」として「水俣」についての読書会を行うようになった。その際に取り上げたテキストは、水俣の共同研究である『水俣の啓示：不知火海総合調査報告(上)(下)』(色川大吉編 1983、1984年)と『水と人の環境史：琵琶湖報告書』(鳥越皓之編 1984年)である。これらのテキストから、水俣についての共同調査の先行研究としての知見と、学際的研究のあり方も同時に議論しながら、実りある共同研究の形を模索していた。

2. 研究の目的

(1) 被害者を特化しない／再生の力：「九州の負の近代史」という視点で「水俣病事件」に着目したが、水俣病事件に関する先行研究は「加害／被害」という枠組が前提で議論してきたものがほとんどであった。しかし、「被害者」とはだれかと改めて問えば、それは制度的に可視化されてきた極めて限定的な対象にすぎない。本研究が目指すのは、それら可視化されてきた患者・被害者あるいは水俣の運動を牽引してきた人々に特化しない「ごく普通の人々」を含めて、今に至る環境の再生や復興の基盤ともいべき民俗の論理・思想的背景を、宗教学・人類学・社会学の専門的視点によって捉えることである。

(2) 「生きる」ための学問の再生：本研究は、共同研究を通じて、学問・研究の意味と

共同研究のあり方を模索することも目的としている。すなわち、研究対象に成果を報告しつつ、その地域と「ともに」学問が生きる方向を模索していくことであり、同時に、本研究それぞれの関連諸学会で報告し、専門領域において細分化されがちな専門用語をつなぐ述語を見出していくことである。このように、ともに「生きる」ための学問として、専門的な学問の「再生」を意図している。

3. 研究の方法

(1) 文献資料の精査と合わせて、現地調査を行う。対象とする集落は患者多発地帯であった茂道集落で、分担者各自の現地調査とともに、共同分析、検討していくことである。具体的には、各自が専門領域に分かれて下記のように研究を分担した。出産の経験がどのようなもので、日常にどう関連していたかを問う「出産・再生システム」(萩原修子)、人間と環境を接続する環境知識、技術などの諸側面から民俗論理を問う「環境・生業システム」(飯嶋秀治)、集落内の意見集約のシステムの諸側面を問う「意思決定・社会システム」(山室敦嗣)、埋葬、慰霊、共同墓地の調査を通じて死と再生の諸側面を問う「死を巡る信仰・実践システム」(西村明)という形である。

(2) 得られた成果を研究対象地域にも開くことにより、知見は見直され、再度地域に問う形を目指す。さらに、本研究は、成果を複数の学会等で報告していくことによって、分断されがちな地域および学問諸分野をつなぐ一端を担う。

4. 研究成果

(1) 本研究の主な成果は、各自の専門と関連した成果として発表されてきたが、最終年度に行った国際学会での発表が、一つの形である。「九州の負の近代史」として水俣病事件を九州の公害のなかに地政学的に位置づけ、その経験が地域にとってどのようなものであったかのかを多層的に議論した。そして、公害被害地で研究・調査することにおいて、研究対象と研究者、学際間が分断されない学問の新しい形を問いかけたものであった。ちょうど東日本大震災の「復興／再生」を考える海外の研究者たちにも報告が共有され、「復興／再生」の意味や調査の方法において今後の協力関係も築けることが確認できた。

(2) 一方で、このような形としての成果以上に、本研究の成果と言えるものは、新たな問題群を見出したことである。そもそも本研究は公害被害地の調査によって、対象の地域と学問・研究の「再生」を問う「試み」でもあった。そのため、本研究で見出された以下に述べる問題群は、「問い」の形をより深化・具体化したものとして、大きな成果だと理解している。

①非言語の領域をどう問い、どう言語化していくか

本研究は、これまで「被害者」として外部から特化されない「ごく普通の人々」の日常性から「再生」の淵源を見出そうとするものであった。それらを理解するために、環境・生業や出産・育児などの生から死にいたる日常性に注目した。しかしながら、研究調査を進める上で、日常性は生命のサイクルの一部として認識されることが一般的で、調査者が期待するような言語化がなされにくい領域であることに気がついた。たとえば、とくに出産や死の領域であるが、出産の体験の前後の習俗は調査地での聞き取りで言語化されても、出産の体験自体は食物摂取や排泄のような自然のサイクルの一部として理解されていて、「なんでもないこと」「だれでもあること」として語られる。それらを意識的に言語化する人はごく限られた環境運動家や患者支援者などである。

つまり、生命が再生産されるという経験は、自然現象の一部として身体で（あるいは腹で）捉えるものであって、それは頭で理解する経験ではないということである。言い換えれば、言語化されない領域において、それらをどうデータとして収集するか、どのような「問い」をたてれば言語化するかわち「データ」となりうるのか、という問題である。出産に限らず死の領域、死者との記憶についても同様である。生者は死者や過去の関係を、喪の作業や日常的な墓参などを通じて切り結んでいく。生業、意思決定においても、身体化された領域で日常は多く積み重ねられる。しかしながら、こうした言語化されづらい日常の累積にこそ、「再生」を生み出す淵源があるとすれば、その問い方を再考していく必要がある。

②「再生」についての問い

「復興」や「再生」という語彙を本研究の主題として使用してきたが、東日本大震災以後の我々は、そもそも何を指して「再生」と捉えるのかも再度考察を迫られた。水俣の場合、事件以後 50 年以上経過して、そこから「再生／復興」とは自然と人の再生であると字義通り仮定していた。しかし、東日本大震災における「復興／再生」を意識しながら調査を続ける上で、「復興／再生」とは、人がその地で生き続けたいと思い、生き続けることを可能にしていくことではないかと議論するに至った。つまり、その地域が存在し、地域に人が愛着をもち、生き続ける基盤があればこそ、「日常」が累積されていくのではないか。このように、「再生／復興」の意味も、震災以後に改めて問い直す必要性を共有している。

③研究対象の地域への応答：飯嶋秀治によるフィールド調査の成果『茂道の命脈』『茂道

の生人』は、現地との緊密な関係によって作成されたものである。途中で報告会もなされ、地域のさまざまな意見を受けて編纂されたという経緯がある。また、その成果も将来的に地域に資するものを目指しているが、被害／加害といった単純な枠組みでは捉えられない、交錯した人間関係のなかで、どのような形の民族誌が望ましいのか。こうした視点が国際学会でも発表された。

④共同調査のあり方への問い

本研究の読書会における出発点であった『水と人の環境史：琵琶湖報告書』（鳥越皓之編 1984 年）『水俣の啓示：不知火海総合調査報告（上）（下）』（色川大吉編 1983、1984 年）の研究調査を例に、望ましい共同調査・研究とはどのようなものか、が再三議論された。その中から、共同調査・研究の歴史について、西村明によって「九学連」の位置づけの必要性が提起された。また、上述の『水俣の啓示』の共同研究者である社会学者・宗像巖の再評価を進める必要なども提起された。

⑤地域の当事者が自ら「復興／再生」に向かう補助線としての学問

環境社会学では、行政と学問を接続する鳥越皓之の「生活環境主義」や、水俣で実践されてきたような地元の人が自ら地元の良さを発見していく「地元学」（結城登美雄、吉本哲郎）など、当事者が主体的に動くための実践的な方法が生み出されてきた。山室敦嗣が問題化しているように、それら有効な思想はあるものの、当事者が主体的に、さらに利用しやすいツールを学問からどう提起できるか。当事者が主体的に創造する必要があるのは「未来」のヴィジョンであるとすれば、本研究で問い直している「再生」の概念にそれは通じるのではないか。そのヴィジョンの創造と実践の営みに、学問の立場から引ける補助線は何かを問うことが、学問の「未来」のヴィジョンでもあり、「再生」にもつながる。

（3）上記の問題群や今後の研究の展望は、罹災地域に限らず、調査地との関係／応答として、学問がどのような方向性を目指すのかについて、喫緊かつ有効な切り口を提供するものと理解している。これらを今後、どのように深化させていくのかも含めて、本研究の成果は、2015 年度の学会のシンポジウムで報告する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 11 件）

①飯嶋 秀治、水俣と民族誌-石牟礼道子『苦海浄土 わが水俣病』を中心として、九州人類学会報、査読無、42巻、2015

(<https://docs.google.com/viewer?a=v&pid=sites&srcid=ZGVmYXVsdGRvbWFpbXreXVqaW5rZW58Z3gMTIyMmExY2FmODFjNTA2ZQ>)

②西村 明、葬送儀礼への第三者の関与-参入と介入の視点から、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有、191、2015、299-314

③西村 明、隔たりへの感受性-遺骨収集・戦地慰霊への宗教学的アプローチ、東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要、査読無、27号、2014、27-36

④西村 明、アジア仏教の現在VI 仏教と死者のゆくえ-近現代の日本からの展望、龍谷大学アジア仏教文化研究センター2014年度第2回国内シンポジウムプロシーディングス、査読無、2014、49-67

⑤姜 信子、研 雄二、萩原 修子、ミナマタからハンセン、そして未来へ:語りえぬことを語るために、千年後の“いのち”の思想、“いのち”の言葉のために、ハンセン病市民学会年報2013、査読無、9巻、2014、220-224

⑥萩原 修子、生み落とされることば、手渡されていくことば - 水俣病事件と「本願の会」、宗教研究、査読有、373号、2012、203-230

⑦山室 敦嗣、問われ続ける存在になる原子力立地点住民 - 立地点住民の自省性と生活保全との関係を捉える試論、環境社会学研究、査読有、18号、2012、82-95

[学会発表] (計 22 件)

①Shuko Hagihara, Investigating life histories: communicating messages from the past, International Union of Anthropological and Ethnological Science, 2014年5月16日、幕張メッセ(千葉県)

②Shuji Iijima, A resident said, 'We get sick of people who want to smell Minamata disease': a fisherman's village after fifty eight years, International Union of Anthropological and Ethnological Science, 2014年5月16日、幕張メッセ(千葉県)

③Akira Nishimura, Mapping Minamata on Kyushu island on the geopolitical perspective and the tracing-layer movements, International Union of Anthropological and Ethnological Science, 2014年5月16日、幕張メッセ(千葉県)

④西村 明、橋を架ける-パフォーマンス的な記憶の比較論、西日本宗教学会 第4回学術大会、2014年3月30日、南九州市川辺町岩屋公園清流の杜 (鹿児島市)

⑤飯嶋 秀治、『命脈』から『生人』へ、第9回水俣病事件研究交流集会、2014年1月11日、水俣市民会館 (熊本県水俣市)

⑥飯嶋 秀治、漁村の命脈、第8回水俣病事件研究交流集会、2013年1月12日、水俣市公民館 (熊本県水俣市)

⑦飯嶋 秀治、私は報告書の返却で失敗した-フィールドに応答する多様な形態、「応答の人類学」(代表:亀井伸孝)+東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト「社会開発 分野におけるフィールドワークの技術的融合を目指して」、2012年11月10日、東京外国語大学サテライト (東京都)

⑧飯嶋 秀治、公共民俗学と水俣、公共民俗学研究会 第8回研究会、2012年9月22日、九州大学 (福岡市)

⑨飯嶋 秀治、「民俗」から「命脈」へ-教育の視点から、第7回水俣病事件研究交流集会、2012年1月7日、水俣市民会館 (熊本県水俣市)

〔図書〕（計 7 件）

①飯嶋 秀治(共著)、九州大学人間環境学府
共生社会学講座、人間共生論叢 特集・漁村
の生人、2014、7-36

②山室 敦嗣(共著)、吉川弘文館、環境の日本
史 5 自然利用と破壊、2013、8-30

③村上 興匡・西村 明 編著、森話社、慰霊の
系譜-死者を記憶する共同体、2013、282

④飯嶋 秀治・関 一敏編、九州大学人間環
境学府共生社会学講座、人間共生論叢 特集・
茂道の命脈、2012、385

⑤山室 敦嗣(共著)、ミネルヴァ書房、現代文
化のフィールドワーク入門、2012、245-265

6. 研究組織

(1) 研究代表者

萩原 修子 (HAGIHARA, Shuko)
熊本学園大学・商学部・教授
研究者番号：60310033

(2) 研究分担者

飯嶋 秀治 (IIJIMA, Shuji)
九州大学・人間環境学研究科(研究院)・准教
授
研究者番号：60452728

西村 明 (NISHIMURA, Akira)
東京大学・人文社会系研究科・准教授
研究者番号：00381145

山室 敦嗣 (YAMAMURO, Atsushi)
兵庫県立大学・地域資源マネジメント研究
科・准教授
研究者番号：90352286